

マタイによる福音書 18:15-20

聖書の御言葉に聞いていこうとする時、皆さんが大切にされていることは何でしょうか。知識でしょうか、それとも、正しい理解でしょうか。あるいは、真面目さ、一生懸命さ、ひたむきさといったものでしょうか。では、私たちがこの日の御言葉に聞いていく時、御言葉が私たちに望むものはどういったものなのでしょう。それは、この直前の御言葉に聞いていくなら、一つには「子どものように」ということです。そして、二つには、迷う者とも迷わずにいる者とも神様は必ずと共にいまし、その私たちのことを大切に大切にしてくださっているということです。それは、神様とイエス様に頼り切っているのが私たち「基督者」であるからです。ここ数週間にわたって、「神様の恵みの場に置かれている」と申し上げているのはそれゆえのことでもあります。それは、私たちが、御言葉を御言葉としてこうして聞くことが許されているのは、そのような神様とイエス様の目が届くところ、声の届くところに私たちがいるからです。ただ、神様の御心が私たちに届けられたとしても、その声が私たちの心に響かなければ意味がありません。では、どうしたら神様の声、イエス様の声が私たちそれぞれの心に確実に響くことになるのでしょうか。そこでよく言われることは、神様に対して心を開くということです。では、心を開くとは具体的にはどういうことなのでしょう。それは、イエス様に頼り切るといふこととということです。そして、そこで大事なことは、神様とイエス様と共にあることを、まさに幼子のように心から喜ぶことのできる素直さで、この直前の御言葉が私たちに語ってくれたことは、私たち基督者のそのような基本的姿勢であるのです。

ですから、この日の御言葉に聞いて行くにあたっては、この前提をしっかりと踏まえておく必要があるのですが、つまり、それが、「幼子のように」ということなのです。従って、それはさほど難しいことではありません。なぜなら、誰にでも身に覚えのあることからです。赤ん坊の頃のことを思い出すのは難しいとしても、小学校に上がるか上がらないかの頃のことなら、恐らくは覚えていることでしょう。その頃の私たちはすべてのことを親に頼り切ってお

りましたし、親なくしては何も始まらない毎日を過ごすものでもありました。頼り切っているというのは、そういうことでもあります。つまりは、それがイエス様を信じる私たちと神様との基本的な関係性であるということです。それは、親にとって子は子であるように、神様にとっても、イエス様を信じる私たちは、どんなときにも、どこにあっても、自分の子どもに等しいものだからです。ただし、神様にとって子と呼ぶべき存在は、こうして御言葉に聞いている「私一人だけ」のことをいっているわけではありません。神様にとって子どもと呼ぶべき存在はたくさんいるからです。

神様が与えられる祝福の一つとして、新たな命が与えられるということがありますが、従って、愛ある関係性においては、自ずと新たな命が与えられ、家族はその数を増やしていくことになるのです。創世記の族長物語が新たな兄弟、新たな姉妹が与えられることを、神様に祝福されたものとして語っているのはそのため、それがまさに神様と私たちとの愛ある関わりであるからです。そして、この関わりを同じように受け継いでいるのが主の教会であります。ところが、祝福のしるしでもある、この数が増えるということが起こると、今度はどういうことが起こるのか。それを語っているのが族長物語の最後に記されているヨセフ物語です。祝福されているにもかかわらず、家族の内に祝福を遠ざける事態が生じたのです。

こうして、家族はまとまりを欠いて不幸を招き寄せることになったのですが、その理由はもちろんそれぞれの罪ゆえのことでもありました。そして、それは、誰の所為、彼の所為ということではなく、いってしまえばみんなの所為とも言えるのですが、そこで一番の問題は、誰彼の所為といながらも、自分自身のありのままの姿を顧みることがなかったということです。それは、本当のことを見て、聞いて、知るのが怖いからです。ですから、そこには当然、言い訳があり、誤魔化しがあります。それは、御言葉が腹の中にしっかりと収まっていなかったからでもあります。このように醜く、惨めな姿を神様の御前に曝すことになったのが神様によって祝福された神の民でありました。ただ、私たちの人

生と同じように、物語はそれでも前に前に進んでいきます。そして、ヨセフ物語の興味深いところは、そういう神の民に対して、神様が直接お出ましになるのではなく、なすがままに任せるのです。そして、それは、ある意味で私たちの教会生活も同じです。

ところで、備えの時を共に過ごした受洗志願者に対し、私は、最後にいつも必ず一つのことをお伝えすると決めています。それは「洗礼を受け、教会生活を始め、その中で必ず思うことは、こんなはずじゃなかったということです。必ずそう思うことがあります、けれども、『それでも』というところに止まり続けることが信仰を深める上で一番大事なことです。」と、いつも必ずお伝えしているのです。それは、罪人が集う教会には必ず破れがあるからです。いや、むしろ、破れのない教会など、この世のどこを探しても一つもありません。しかし、理想に燃え、あるいは、受洗への不安を覚えている人に私がこのようなことをお伝えすることは、もしかしたら、余り好ましいことではないのかもしれませんが。水を差すか、あるいは、いたずらに恐怖心を植え付けるか、いずれにせよ、出鼻を挫く言葉であるのは間違いないからです。しかし、そう思いつつも、受洗準備の最終日に必ずこの言葉を伝えているのは、新たに生まれ出ようとしている命と生涯ともに歩み続けたい、主にある兄弟姉妹と共に祝福された神の家族を築き、その兄弟姉妹と手を取り合って御国の扉を通り抜けたい、この強い思いがあるからです。そして、こうして皆さんとご一緒にこの日の御言葉に聞いていき、その思いをまた新たにされてもいるのですが、ただ、御言葉は、それについて直接的に何かを語っているわけではありません。けれども、直前で「これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなた方の天の父の御心ではない」と、神様の御心についてイエス様がこう仰っていることから分かりますように、神の国が完成するその終わりの日までを共に歩み続けること、それが神様とイエス様が私たちに最も望んでおられることだからです。

そこで、ふと思い出したことは、今、ぼちぼち読んでいる「証し」という本に書かれていたことです。それは、長崎の潜伏キリシタンの末裔である、ある五十代半ばのシスターの話ですが、その中のある箇所が私の目にとまったのです。ご紹介しますと、その方はこう仰っておりました。「私の二番目の姉が中一の夏に大病を患っ

て、1年10ヶ月の間、入院と手術を繰り返した後、病気の進行が止められなくて、左足大腿部からさきを切断したのです。骨を削りながら治療を受けている姉を見て、母もたまらなかったんだと。お見舞いに来てくださったシスターが『神様はその人が耐えられないような試練を与えられないよ。試練を乗り越えることができる力を神様はくださる』と母に言いました。聖書にあるパウロの言葉ですが、ちなみに、その御言葉とは、今、皆さんとご一緒に聖研祈祷会で読み進めているコリントの信徒への手紙Ⅰ10:13であります、それを聞いて、母はその言葉で救われたそうです」とこう仰っていたのです。ただ、その後、こうも語っておりました。「ただ、これは果たしてすべての人に共通する癒やしの言葉なのかと言えば、「はい」とは言えないと思います。『母のケースです』としか言えない。本当は母も、『それでも耐えられないくらい苦しんだ』と言いたかったのかも知れません。たぶん、その時の母じゃないと分かりません。その時の姉の思いも」とこう語り、その証しは終わっているのですが、このように、私たちが御言葉に聞きそこでいくら慰めと癒やしが与えられたとしても、分からないとの思いは必ず残されるものなのです。

ですから、そういう意味で、私たちが完全に御言葉の意味を知ることはありません。どこまで行っても分からないとの思いは必ず残り続けることになるのです。けれども、この日の御言葉を通してイエス様が語るところは、私たちが終わりの日を共に迎えることが神様のたつての願いであるということです。ですから、そう考えるなら、ここでイエス様の仰っていることは、私たちがつつがなく終わりの日を迎えるための知恵であると思うのです。それは、先ほども申しましたように、神様、イエス様と私たちの関係性に破れがなくとも、私たち自身の内側には必ず破れがあるからです。その一つが今申しました「どこまで行っても分からないところが残される」ということでもあります、従って、私たちが成長するということは、もしかしたら、この破れをなくすことではなく、広がる破れを知恵をもって修復していくことだとも言えるのでしょう。なぜなら、知識と経験が広がるとともに、私たちの不安、恐れは、小さくなるどころか、どんどん膨らんでいくものでもあるからです。ですから、イエス様がその私たちに向かって「幼子のように」と語り、その上でここで主にある兄弟

姉妹として歩む上での知恵を与えてくださっているのは、そういう私たちであることをよくご存知だからです。

そこで思い出されるのが、コリント信徒への手紙―13章に記されているパウロの愛の賛歌です。その中でパウロは、「幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。」とこう語っているのですが、この、幼子を捨てるということが、私たちの成長の過程において必然的に起こってくることでもあるのです。つまり、神様とイエス様に依り頼むのではなく、自分の足で、自分の力で生きようとする、そして、この自分というところにすがすが余り、自分だけのことしか目に入らなくなってしまう、それについてアウグスティヌスは「神を軽蔑するに至るほどの自己愛がバビロンの国を造る」と言ったそうですが、つまりは、大いなる存在をも自らを高め、際立たせるために従わせようとする、そして、それは、信仰の形をもってして、あるいは、誰もが納得する形での正当性をもってして、公然となされることがあるのです。アメリカの同時多発テロの直後、アメリカ国民の90%近くの人々が、復讐を誓ったブッシュ大統領を支持したように、力に対して力に応えようとする時、私たちは道を踏み誤ることがあるのです。

そして、それを私たちは罪と呼んだりもするのですが、罪を罪といくら言い回したところで、言い回るだけでは何も変わることはありません。おかしいことをおかしいと言うことは大事なことでありますが、それで何かが直ちに変わることがないのは私たちの誰もが知るところです。ですから、そうならないためにも、私たちは、自分だけの信仰、自分だけの思いに溺れるのではなく、溺れないためには、ここでイエス様が仰るように、御言葉による知恵に聞き、主にある兄弟姉妹の力添えを互いに必要としているのです。そして、そのために必要なことは、交わりの力を信じるということです。ただ、私たちに信仰を伝えたアメリカの教会が分裂し、また、私たちが帰属する日本基督教団の教会が50年にわたって意見を異にする者同士が反目し合っているように、その足下を見ていく時、「交

わりの力を信じる」と言っても、いささか心許ないのも確かなことなのです。ですから、ここでイエス様が仰っていることは、特に、「教会に申し出なさい」と仰っていることは、どこか空々しく聞こえてしまうものなのかもしれません。しかし、もちろん、それでいいとは言えませんが、言っただけではいけないのだと思います。けれども、そう思いたくても、そう信じたくても、そうは思えない現実が、雲の柱、火の柱のように、どこまでも私たちの前に、また後をついて回ってくるのです。ですから、そう考えると、イエス様がここで「異邦人か徴税人」と仰っていることは私たち自身ということにもなるのでしょうか。では、その私たちが本当に救われ、御国の門を通り抜けることができるのでしょうか。

恐らく、私たちのこの不安、恐れが完全に失われることはないと思います。それは、私たちが神ではないからです。しかし、だから、手をこまねいて、現状に流され、何もせぬまま、後は野となれ山となれ、ということをしてイエス様は望んでおられるわけではありません。なぜなら、どうにでも好きにしろ、ということであるなら、十字架ほど不必要なものはないからです。ですから、和解と赦し、御言葉の語る知恵に基づいた明確な意思決定と判断、神様とイエス様がこれらのことを私たちに求めておられるのは間違いありません。しかし、それにもかかわらず、私たちの心の中にはいつも課題が残されたままなのです。わだかまり、不信感、敵意や憎悪、私たちが決して望んではいないこれらのものが、心の中で大きくなっていくのを、私たちは教会の中にいながら経験し、もしかしたら、まさに今経験しているのかもしれません。ですから、破れを繕ったそばからまた破れていく、ある意味で賽の河原に石を積むがごときことを、イエス様を信じる私たちは日々しているということでもあるのでしょうか。御言葉の語るどころ、教会の語ることをきれい事と思ってしまうのはそれゆえのことです。しかし、それが間違いなく私たちでもあるのです。そして、神の子でありながら私たちと同じ人の子として歩んだイエス様には、そのことがはっきりと分かっていたのです。なぜなら、和解と執り成しを語りながら、イエス様がそこに限界があることをここではっきりと語っているからです。

では、どうすれば、私たちは破れをこれ以上広げずに落ち着いた暮らしをすることができのでしょうか。そのために必要な

ことは赦し、和解、執り成しということでもあります。そのことを十二分に知りながらも、それが完全な形で実現したのを私たちはいまだに見たことはありません。冒頭のところで語られていることへの共感を抱きながらも、その一方で、イエス様のこの言葉にどこか期待できずにいるのはそのためです。対話してもかみ合わず、赦そうと思い我慢して行動に移しても、結果が伴わない、この繰り返しの中で疲れ切っていく兄弟姉妹の姿を、私たちはこれまで何人見てきたことでしょうか。では、イエス様はきれい事だけをここで並べたてているのでしょうか。もし、ありもしないこと、できもしないことをイエス様が語っているとしたら、では、イエス様を通して知らされている知恵とは何なのでしょう。それこそ、大本営発表のように、実体のないものがあるかのごとき語り、強制的に行動変容を迫るものを、私たちは知恵と呼んでいるのでしょうか。もちろん、そうではありません。では、そうではないなら、イエス様の語る知恵とは一体どういうものなのでしょう。

何をするのか、どう振る舞えば良いのかというところから、私たちは、知恵の意味、異議を考えているのではないのでしょうか。けれども、聖書の御言葉において知恵とは、何をする、何をしないといった、そういう人生訓のようなものではありません。「神を畏れることが知恵の初め」とあるように、畏れるとはつまり、神様がいますところ、イエス様の息づかいが感じられるところ、そこに身を置いているということです。ただから、御言葉は見よ、聞け、知れと語るのですが、つまりは、私たちはどこにあって、どんな時にも神様とイエス様の目の届くところにいるということです。それが、ここ数週間にわたって繰り返しお伝えしている「恵みの場にいる」ということでもあります。ただし、それは私たちを監視し、都合のいい様に従わせるためではありません。「子どものように」ということは、見下したものではなく、頼り切ることに何のてらいもためらいもない、イエス様を信じる私たちとは、そういうものだということを言っているのです。

ですから、私たちがイエス様と共に神様を見ているなら、何をして何をしないかは自ずと分かるはずなのです。けれども、それが分かりながらもできないのはどうしてなのか、それは、もしかしたら、私たちが罪の現実をいいことに言い逃れしているか

らなのではないでしょうか。つまり、罪を笠に着て、できるわけはないでしょうと決め込み、最初から諦めてしまっているから、ただから、与えられることばかりを期待し、求めることをしようとしません。では、私たちが今こうして置かれている

「恵みの場」はそれほどまでに貧しいものなのでしょうか。もちろんそうではありません。なぜなら、知恵とはつまり、そうではないというところに目を開くもの、空しく、空々しく感じざるを得ないそのような現実にあって、なお、神様を信じ信頼できるということを語るものだからです。そして、それは、私たちが今現に「恵みに満ちあふれた場所」に生きているからでもあります。従って、知恵とは、ここに私たちの目を、耳を、鼻を、舌を神様に向かわせる力であって、それを気づかせようとしているのが、18節以下のイエス様のお言葉でもあるのです。

だから、イエス様はこう仰るのです。

「はっきり言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつながれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる。また、はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まるころには、わたしもその中にいるのである。」と、つまり、この事実、この現実こそが私たちを私たちをして私たちらしく生かすのであり、ただから、この事実を目を開くものを私たちは神の知恵と呼ぶのです。それは、この恵みの場、この真実に生かされていることを知っているのが私たち基督者において他にはないからです。従って、私たちがどんな時にも、どんな状況でもやるべきことがあるのはそのためです。私たちが御心を尋ね求めずにはいられないのはそのためでもあります。だから、与えられることをただ待っているのではなく、神様とイエス様に絶えず祈り求めるということが私たちには求められているのです。そのためにも、イエス様と共に神様としっかりと繋がっているというこの実感、この経験、この感覚を、この主にある兄弟姉妹の交わりの中で深めて参りたいと思います。またそれを養うためにも、きれい事では終わらない、主にある兄弟姉妹の基督者として歩んだその証しを共に分かち合っていきたいと思うのです。祈りましょう。